



みずみどり

2020年 6月1日 第138号

発行：いたばし水と緑の会事務局

年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会
<http://mizumidori2.eco.cocan.jp>E-mail : mizumidori@nifty.com

〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124

身近な自然を感じよう

集まって何かをすることがはばかれるようになりました。「こんな生き物がいたよ」と頭をくっつけてのぞきこむのはだめ！

ビオトープを見守り管理する水と緑の会の活動は続いています。屋外で、少人数だし、くっついて作業するわけではないので「3密」ではありません。それに私自身が、公園の緑の中で清々した気持ちでいられます。

コロナ自粛によって、人は屋外で気持ちよく過ごせる場所を求めます。赤塚公園（赤塚ため池も）には多くの方が訪れています。レジャーシートを敷いて腰を下ろせる草の広場、子ども達が走り回り、ダンゴムシを探したりできる公園のありがたさ。

草原でお弁当を広げる家族も楽しそうです。親子連れは昆虫網と虫籠をもっています。ご夫婦で一人で散歩している人等もいます。赤塚公園に来た人達は、身近にほっとできる場所の有り難みを感じたでしょう。

私もその一人です。

コロナ禍で感じたことは、人間は自然の中の生き物、自然の一部であることです



毎年流行するインフルエンザは渡り鳥の糞に混じってまき散らされたインフルエンザウイルスが動物から人に感染するのだそうです。

渡り鳥はインフルエンザウイルスに免疫があっても感染しても死なないとか。

渡り鳥がもたらす鳥インフルエンザで大量の鶏が殺処分されたニュースは衝撃的でした。新しいウイルスに感染して死んだ渡り鳥のニュースもありました。

バッタ広場にいると、人間は自然界の一員だと感じる事がしばしばあります。

私は動植物に詳しいわけでもありませんが、いつもの場所に出かけるときは、今日は何に出会えるかなあと期待します。最近はずぐ忘れてしまうので、メモ代わりにデジカメ（スマホは使えないので）を活用しています。デジカメでもスマホでも画像を拡大して見ると、小さな花のつくりがよくわかり、小さな虫も毛むくじゃらだったりして、驚いたり感心したり、興味が尽きません。



写真左はとんぼ池に来たカラス。口いっぱいにくわえていた枯れ草を置いて、水を飲んでまた枯れ草をくわえて飛んでいきました。巣材です。写真を見るとクリッとした目がかわいい。人の目につかない場所で子育てしてくれるといいのですが・・・。

5月23日、バッタ広場では、小さな虫たちがたくさんいました。小さなクモいろいろ、ハナアブ、テントウムシ、コメツキ、名前のわからないハムシ、カナヘビ。越冬していたクビキリギリス、これから産卵するのでしょうか。小さなクモもテントウムシもカナヘビも肉食、生き物を食べます。この日気温が上がり、今年はじめて蚊に刺されました。

生き物達は関わり合って生きている

コロナだ、消毒だ、手洗いだ。世界でも、日本でも、地域でもそんな話ばかりですね。以前から私たちの身の回りに除菌グッズや消臭剤などが売られ、「ばい菌」を排除する風潮を感じていました。私の子どもの頃（戦後）、学校で定期的排便検査があり、寄生虫が見つかったら駆虫剤を飲まされましたが、それ以前は寄生虫と共存するのが普通。清潔好きの現代人も生物としての人間の腸に大腸菌（よいのや悪いの）が、皮膚には常在菌がすんでいるそうです。

生き物の世界では、生き物達が関わり合って生きています。

次頁写真左は、気持ち悪いという人も多いと思いますが、「虫こぶ」です。バッタ広場のエノキの葉にこのような「虫こぶ」がいっぱいついています。虫こぶを割ると小さなウジ虫が1匹入っています。虫こぶは、小さなハエ（タマバエの一種）がエノキの葉に卵を産むと、エノキの葉が刺激を受けて卵を包み込むようにふくらんだものです。

卵が育つと落下し、幼虫→サナギで越冬し、翌春に羽化したタマバエが新しいエノキの葉に産卵します。小さな虫の複雑な生態にも、卵を受け入れ卵を包み込むエノキの包容力にも感心します。このタマバエ（エノキトガリタマバエ）はエノキに卵を産みますが、いろいろな木や草に、



いろいろな虫（昆虫だけでない）が卵を産んでむしこぶを形成しています。変な葉っぱや茎を見たら、それは虫こぶかもしれません。

次は私が見た虫に寄生する虫の話です。先日ため池公園にハチの死骸がありました（写真右）。

お尻から出ている長い針は産卵管です。このようなハチを以前にも見たことがあり、木の内部を食べるカミキリムシなどの幼虫に卵を産み付ける寄生バチと聞きました。すごいですね。



写真左上は、死んだアオスジアゲハ（？）の幼虫から出てきた寄生虫のサナギ。右上のイモムシは、生きていましたが、背中に背負っているのは寄生虫の幼虫のようです。

食物連鎖—言葉でわかっていたつもりでも、生き物達の世界はまるでジャングルです。

オタマジャクシは今年も全滅

カルガモに完敗

毎年カエルが産卵し、生まれたオタマジャクシが消えてしまいます。オタマジャクシを食べたのはカルガモらしいとわかり、一昨年と昨年はオタマジャクシがカルガモに食べ尽くされるまでを観察して確認しました。生き物は満腹すればそれ以上食べないと思うのですが、本当にカルガモはオタマジャクシという食料資源がなくなるまで毎日来てしつこく探して食べます。あちこちで見かけるようになったカルガモは、人がくれるパンだけでは栄養が足りないのかもしれない。とんぼ池は小さな生き物達の場所として、今年は池の一部をネットで覆ってオタマジャクシを保護しようと考えました。

カルガモは4月12日から来ました。中途半端なネットではだめだったので、何度も補強し直し、蚊帳のようにすっぽりおおい、裾には重しの石を置きました。

カルガモは、まずネットで保護した区域以外のオタマジャクシをあさり、池底をあさり、オタマジャクシを保護しているネットに接近、ネットの際からオタマジャクシを食べました。19日には隙間から中に入って食べていました。不和さんが外から追っても逃げなかったそうです。ネットの隙間を塞ぎ、さらにネットをかぶせ万全にしたつもりでしたが、5月5日には食い尽くされて全滅しました。4月30日、オタマジャクシは減ったように見えたのですが、カモがどこから入ったのかわかりませんでした。オタマジャクシは大きくなって、足がでてきていました。

カモは水草が伸びて網が少し持ち上がった裾のわずかな隙間から入り込み、水草が茂った狭い中を徹底的に探索して、1匹残らずオタマジャクシを食べたようです。生き物の世界は残酷です。

カルガモは人間の仕掛けた網を危険なものとして認識しませんでした。人間は無害で餌をくれるだけの存在なのですね。なめられたものです。

10年ほど前、私の住む中台で、毎年3月初めの夜、ヒキガエルがのそのそ歩いているのによく出会いました。車から降りて道のカエルを拾い上げて安全な道路脇に移している優しいおじさんを見ました。大量に豆ガエルが上陸し、うろうろしていて踏みつけるほどいたときも何度かありました。夏には樹林地の傍で何匹かの豆ガエルを見ました。こんなにたくさんいても、ヒキガエルの子どもの大きさは1cm程、大きくなるまで野鳥やトカゲなどの敵が待ち構えていて、前途多難です。

以前は、カエルなんてどこにでもいると、オタマジャクシにも注意しませんでした。

最近、中台や西台でカエルに会わなくなり、とんぼ池に来るカエルの数も減っています。ヒキガエルが繁殖に成功するのは運もあるようですが、オタマジャクシが住みやすい環境を考えなければならないと思うようになりました。



とんぼ池ではオタマジャクシは全滅しましたが、他のオタマジャクシはどうしているか5月20日にようすを見に行きました。大仏下の小さな池では、4月にはたくさんのオタマジャクシがひしめいていましたが、5月20日見たときは15匹くらいに減っていました（写真左）。21日、渡辺さんによると全滅したそうです。渡辺さんは、子ども達が捕りに来てはいたが、これほど急にいなくなったのはカルガモしか考えられないといえます。



オタマジャクシがたくさんいた沖山にある池（写真左）では、数は減ったようですが、うしろ足がちょっと出たオタマジャクシが泳いでいました。生物多様性事業によって拡大整備された池です。掘り下げられて水が湧き、水もきれいになり側溝に流れ落ちていきます。ここは、2018年は落葉が溜まって黒く、汚れた水にすむ生き物がいた「汚い水たまり」でしたが、オタマジャクシがいっぱいいたし、何匹もの小さなカエルが上陸したのを見ました。整備されて周囲も刈り込まれて

明るくなりましたが、カルガモに目をつけられないといいのですが・・・

とんぼ池の古い観察記録を見ると、漏水等でほとんど水がないときにオタマジャクシは生き延び、カエルになっていました。猪鼻さんの庭の池には、カエルが産卵に来て困るほどだったそうです。水面が小さい方がカルガモの目につかず、オタマジャクシには有利なようです。カルガモの水生生物に与える影響は大きいと思います。



オタマジャクシが全滅してがっかりしてしまいましたが、気を取り直して、ネットを外し、水面を覆って繁茂した水草を刈りました。これからトンボがやってくるからです。

とんぼ池をどうしたらよいか、方向が見えません。池のほとんどは深く普通の長靴では入れませんが（前ページ左下）、フェンス際の棚田1は土を入れて浅くしたので、ここでトンボのヤゴの調査をしたい。頻繁に水草刈りが必要ですが。

問題は、いっぱいいるザリガニをどうするかです。動作が鈍いカルガモはザリガニを捕る気はない。水深がある場所ではサギ類もため。頼みの綱はカワセミ。カワセミがザリガニを捕ったのを見ましたので。

水草を刈っていると、池の上をギンヤンマが飛んでいました。これから目にすることが多くなりますね。右は昔撮った写真でクロスジギンヤンマが水草に産卵しているところ（クロスジギンヤンマはメスだけで産卵、ギンヤンマは♂♀がつながって産卵します）。



キンランとギンラン

とんでもないところに生えてくる不思議

キンランとギンラン、金と銀、名前から見ると貴重な野草に思えます。キンランの方が、値打ちがありそうですが、最近では箱根の山で咲いているのを見たとし、以前大田区の高摩川台にある公園で足元にたくさん咲いていたので、場所によってはそれほどめずらしくないかもしれません。板橋区では、特定の人知っている秘密の場所に咲く花という思いもあります。

ラン科植物で、草丈は15cm程（ギンランは少し小さい）。花が黄色いのがキンラン、白いのがギンランです。花の大きさも1cm位、名前の豪華さと程遠い清楚な花です。

今年、私は日暮台公園でキンラン2株が咲いているのを見ました。ギンランは赤塚城址、日暮台公園、西台公園で見ました。他にも自生地はあると思います。珍しい野草の存在は盗掘をおそれて秘密にされていましたが、昔から残されて板橋区の「山の土」が守られてきたから、存在し得た板橋区の貴重種のことを書いてみたいと思います。

会報135号に新井康之さんが「キノコの世界 腐生菌と菌根菌」について書いています。木の切り株やおがくずから栄養を摂取する椎茸などの腐生菌に対して、菌根菌は自分で栄養をとれないので、樹木の根からエネルギー源（糖質）をもらい、ミネラル等を木の根に与えて樹木と共存しています。キンランやギンランはその菌根菌に寄生していて三角関係にあります。キンランだけを掘り出して庭に植えても、その土地にキンランにあった菌根菌がなければ育ちません。菌根菌の恩恵はキンランだけの話ではありません。菌根菌がない土に木を移植しても丈夫に育たないという話を聞きました（埼玉県生態系保護協会高野徹さん、会報133号）。

自然は「手っ取り早い」の反対です。菌根菌の成長は遅く、それぞれの菌根菌は特定の樹木と共生します。キンランやギンランも特定の菌根菌に寄生します。ふるさとの植物が育つ「ふるさとの土」を侮ってはいけません。

西台公園は10年ほど前の大改修で遊具が設置されて子ども達の遊び場になりました。管理（草刈り等）によって表土が流出し、子ども達は遊具で遊んだり、斜面の上から滑ったり走り降りたり楽しそうです。自然を愛する私にはがっかりな環境になりました。ここは以前からギンランの自生地でしたが、ギンランは自然らしい場所ではなく、草刈りされツルツルの土に生えています。しかもいっぱい（写真下左、右）。



日暮台公園では斜面林内に何本か生えています、そうではない場所にも生えています。写真右は、ツルツルの地面に出てきたギンラン、2本ともちぎられています。日暮台公園ではギンランはただの雑草。

それにしてもなぜこんなところに生えているのか不思議でした。

ギンランにとって大切なのは、地上ではなく地下の環境だったのですね。



ニリンソウは区の花として多くの人がお花見に行きます。日暮台公園には、手を入れずに残された山（の土）があり、ちやほやされないけれど他の公園ではみられない野草が咲きます。そういう樹林地を価値あるものとして、保全していきたいと思います。

活動のお知らせ

活動の問い合わせ等は事務局 瀬田（3969-7124）または
坂本 090-4618-1295

1 赤塚ビオトープ（赤塚トンボ池、バッタ広場）の手入れ

6月27日（土）10:00～11:30 バッタ広場の手入れ（草刈り）

7月25日（土）10:00～11:30 バッタ広場の手入れ（草刈り）

集合場所：赤塚トンボ池前

雨天の場合は中止（または翌日） 問い合わせは：事務局まで

汚れてもよい靴と服装で。軍手（作業手袋）、蚊も出てきました。

2 赤塚城址自然観察会（第2日曜日）

どなたでも参加できます。子どもさんも一緒にどうぞ。生きものは観察したら自然に返してね。30分程度ササ刈り等もやります（カマは用意します）。

小雨でも実施。連絡先：事務局まで

6月14日（日）10:00～11:30

7月12日（日）10:00～11:30

集合場所：板橋美術館そばの赤塚トンボ池前

参加費：無料（保険には加入していません）

もってくるもの：長袖の服、あれば双眼鏡、虫眼鏡、図鑑、虫よけ

3 日暮台公園と樹林地の観察

6月7日（日）10:00～11:30

7月5日（日）10:00～11:30

日暮台公園前集合

連絡先：事務局または坂本（090-4618-1295）

●ビオトープボランティア大歓迎

いたばし水と緑の会は、自然と共存するまちづくりをテーマに、ビオトープ（赤塚トンボ池と赤塚公園バッタ広場）などの観察と手入れ作業、日暮台公園自然樹林地の定点調査などを行っています。定点の観察と手入れを通して、季節の変化や新しい発見があって楽しいですよ。

●会員になってくださると板橋の自然情報を中心とした会報「みずみどり」（隔月発行）お送りします（年会費2000円：振込先は表紙に記載）。

●身近な自然情報やご意見などをお寄せ下さい。